

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2012年5月 NO.167



[もくじ]

- 2 新法人 機に飛躍～理事長就任ごあいさつ～…岩井寿夫
- 3 高知市文化プラザかるぼーと開館十周年
- 4～5 フィンランド便り…櫻木厚子
- 6～7 南極観測隊同行日誌(中)…森岡美和
- 8～9 第22回高知出版学術賞を審査して…中内光昭
- 10 言葉の現場から 33「君の手の冷たさ」のなぞを読み解く…広井護
- 11 鎮守の森は今 県内の神社めぐり体験記(三)…竹内莊市
- 12～13 高知市文化振興事業団2月～4月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

理事長就任ごあいさつ

岩井 寿夫



薫風さわやかな季節となりました。皆さまには日ごろから当事業団の活動にご理解とご協力をいただき、まことにありがとうございます。

平成二十三年は、東日本大震災という未曾有の災害が発生し、日本全体がこれまでの価値観を見直す中、文化の有用性についても改めて思いをはせる年になったと思います。また、七月には吉村浩二理事長が任期半ばで急逝され、当事業団にとっては、二重の意味で忘れられない年となりました。

故吉村浩二氏は、金高堂書店の経営の傍ら、当事業団の理事を長年務め、平成十八年度から理事長として事業団の先頭となって高知の文化振興に努めてこられました。文化に対する深い造詣と幅広い人脈を持たれ、事業団を牽引してきた氏を突然失ったことは、事業団のみならず、高知の文化にとって

も痛恨事であり、今なお悔やまれてなりません。

逝去後は藤村健次郎副理事長が理事長代行を務め、その後十月に開かれた理事会において、私・岩井寿夫が後任の理事長に選任されました。故吉村浩二氏の遺志を継いで理事長の職に取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いたします。

さて、公益法人制度改革についてお聞き及びの方もおられるかと思えます。

当事業団は設立の趣旨から、当然に公益法人への移行を目標とし、制度施行時より、関係各位の指導・助言をいただきながら検討を重ねてまいりました。そして昨年末には公益法人への移行申請を行い、高知県公益認定等審査会より公益法人認定の基準に適合するとの答申を得、平成二十四年四月一日付

で公益法人に生まれ変わりました。これにより、名称は「財団法人高知市文化振興事業団」から「公益財団法人高知市文化振興事業団」となりました。

移行によって、法人税の優遇が引き続き保証されるほか、個人の寄付金に対する所得税及び住民税に関わる控除措置が設けられたこと、また、法人にとっては法人税の寄付金損算入が認められることなど、当事業団への寄付を受け入れやすい環境が整いました。個人や企業の皆様も社会全体のことを考える「公」の精神を持って寄付先を選択し、その寄付金により安定的・継続的に公益目的の事業が展開されることを期待されます。新法人への移行は事業団のさらなる発展へのステップと考えます。文化各般の事業活動にあって、ある時は先陣を務め、ある時は後方から力強く支えてい

くことを改めて決意しました。今後とも皆さまのご指導・ご支援をお願いいたします。

前理事長故吉村浩二氏のご遺族から昨年十月二十八日、当財団に百万円の寄付をいただきました。故吉村浩二氏の遺志を継ぎ、最大限に活かせるような用途を現在検討しています。



故吉村浩二氏の妻・吉村教子さんからご寄付をいただきました

いわい としお
一九三八年 高知市生まれ
株式会社高知新聞社相談役、二〇一一年十月六日から高知市文化振興事業団理事長。

高知市文化プラザ かるぽーと開館十周年



かるぽーとは、ことし開館十周年を迎えました。年間約五十万人の市民に利用され、高知市における芸術文化、生涯学習の拠点施設としての役割を果たしています。

二〇〇六（平成十八）年に指定管理者制度が導入され、現在は高知市文化プラザ共同企業体が全体管理とホール・ギャラリー等の貸出しに当たっています。それに伴い、当事業団は主に文化事業および公民館管理・運営を担うこととなり、高知市文化プラザ全体を二つの団体が協力し合いながら運営しています。

これからも芸術文化の日常生活へのいつその浸透を図るとともに、生活文化の向上に取り組んでまいります。また、かるぽーとが、市

民から必要とされ、「地域の核」として無くてはならない施設となるよう、これからの十年を歩んでまいります。

開館十周年記念事業のお知らせ

○ウィーンの森バーデン市劇場 オペラ「トスカ」

九月二十六日 十八時半開演 大ホール
三百年の歴史を誇るウィーンの森バーデン市劇場の二年ぶりの公演。生演奏、字幕付きで、オペラ初心者もお楽しみいただけます。



本場オーストリア・ウィーンの雰囲気を感じていただけます。

○高知市民ミュージカル「音の旅人」

十月二十日・二十一日 大ホール



二〇〇八年に上演し、好評を博した市民ミュージカルの再演。高知の文化財産として今に繋がる「よさこい祭り」の基礎を創り上げた武政英

策を通じて、現代に生きる我々が引き継ぐべき「自由に音楽を愛する心」を表現します。

○ペギー葉山歌手生活六十周年記念コンサート

十一月四日 十五時開演 大ホール
名曲「南国土佐を後にして」で高知県民に格別に親しまれているペギー葉山の歌手生活六十周年記念コンサート。



○南河内万歳一座×高知演劇ネットワーク・演会
二月一〇日・十一日・十六日・十七日 小ホール
関西小劇場界屈指の劇団、南河内万歳一座によるパワフルな演劇公演と、高知で活動する演劇団体の選抜メンバーによる合同公演の豪華二本立て！



○横山隆一記念まんが館企画展
「黒潮からのメッセーヂ展」
七月十六日～九月十七日
世界最大の海流の一つである「黒

潮」は日本の環境や文化に大きな影響を及ぼしています。本展では私たちを取り巻く、生命の源でもある「黒潮」の持つ豊かな可能性を科学の視点とまんが家の柔軟な感性の両面から探ります。



「八月の鯨」横山隆一

○横山隆一・長谷川町子二人展

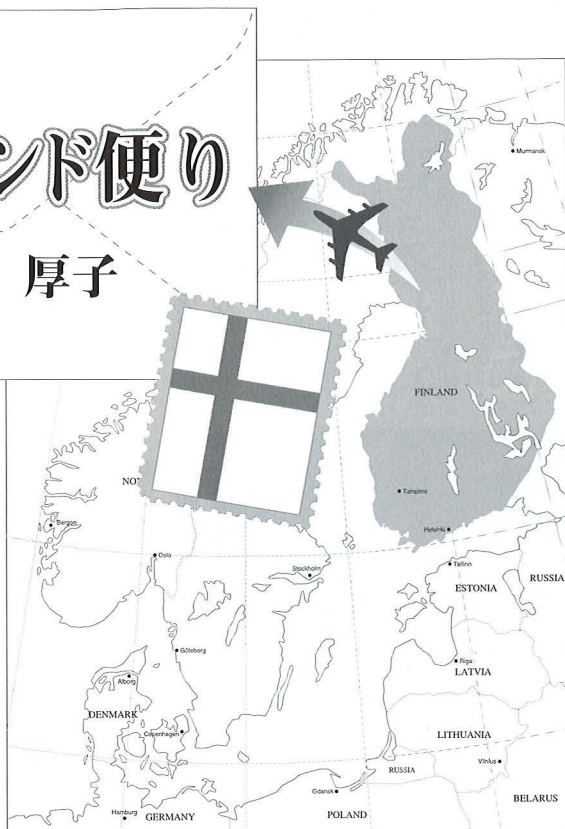
九月二十九日～十一月二十五日
日本まんが史を語るうえで欠かせない新聞四コマまんが、横山隆一の「フクちゃん」と長谷川町子の「サザエさん」。作中に何気なく描かれる日常には、今となっては懐かしい風景が垣間見えます。本展では、同じ時代を過ごしたこの二作品の歴史をたどると同時に、



当時のニューズや民具展示を交えて比較紹介し、昭和の時代を振り返ります。

フィンランド便り

櫻木 厚子



私はフィンランドの首都ヘルシンキに住んでいます。フィンランド放送交響楽団にトランペット奏者として入団して二年半になります。土佐女子高校を卒業してから、京都スウェーデン、ドイツで音楽を勉強しました。まさか南国土佐育ちの私が、一年の半分が冬の北欧フィン

ンランドに就職するとは思ってもみませんでした。

ヘルシンキのコンサートホールで週に一回か二回コンサートがあります。これが私の主な仕事です。一年に一回か二回は国内、海外に演奏旅行にも出かけます。行った事の無い都市に出かけるのはとても楽しみです。オーケストラのリハーサルはコンサート前日に二、三日かけて行います。朝の十時から休憩を二回挟んで午後二時半までリハーサルをします。後の残りの時間は、私は個人練習をしたり、ジムに行ったりして過ごしています。

フィンランド人は素朴で、平和でのんびりとした雰囲気の人が多いと思います。森と湖に囲まれて自然がたくさんあり、フィンランド人は自然を愛しています。人口も少ないので、人がせかせかしていません。ヘルシンキには放送交響楽団の他にも、ヘルシンキフィルハーモニー、国立オペラと三つの大きなオーケストラがあります。ヘルシンキフィルと放送響はともに百人弱の大きなシンフォニーオーケストラで、毎週同じコンサートホールで最低でも週に三日間はコンサートがあります。

フィンランドの文化や教育は世界でもトップクラスの環境にあると思います。

二〇一一年八月にヘルシンキに新しいコンサートホールが完成しました。このホールの中には、放送響とヘルシンキフィル、シベリウスアカデミー（フィンランド国立音楽大学）の三つの団体が共存しています。大きなクラシック用のコンサートホールとリハーサル用の大きな練習場、オルガンホール、室内楽やソロ用の小ホール、カフェ、レストラン、CDショップなどがあります。大ホールは、最近の世



ヘルシンキのコンサートホール（内観）

界のコンサートホールの中ではおそらく一番音響のいいと言えるホールだと思っています。客席数は千七百席で、新しいホールになって以来、毎コンサートが有り難い事にほぼ満席の状態です。ヘルシンキフィルのコンサートにもたくさんお客さんが入っていて、よくチケットも完売になっています。

フィンランドだけに、放送響の練習場には小さいものですがサウナがあります。男性用と女性用と一つずつあります。冬の寒い時期は練習後やコンサート後にサウナに入っ

基本的にフィンランド人指揮者の時はリハーサルはフィンランド語で進められます。フィンランド語の数字を聞き取ることができれば何とかリハーサルにはついて行く事ができます。たまに同僚に助けをもらう事もあります。日常の会話は英語を使っています。フィンランドに住んで二年半経ちますが、なかなか難しい言葉で、未だに喋れないので申し訳ない気分です。週に一度フィンランド語講座に通って勉強しているのですが、思うように進歩の兆しが見られません。早く喋れるようになりたいものです。

フィンランドと高知の違う所はたくさんありますが、やはり気候と天気が一番大きいように思います。高知は冬でも暖かく太陽がまぶしいですが、フィンランドの冬は本当に長く厳しいです。三月中旬の現在でもまだ雪が残っています。十一月、十二月は特に日照時間が少なく、一日中どんよりとしています。朝起きても真っ暗で午後二、三時頃外に出ると、もう暗くなっています。クリスマスが近づいて来ると、太陽が本当に恋しくなります。冬はとても長く厳しいのですが、逆に夏は白夜で六月の夏至の頃は一年のうちでも最も日が長くなります。

て家に帰るのが私の密かな楽しみになりました。

放送響は過去に三回日本に演奏旅行に行った事があるそうです。私もいつかオーケの一員として日本にツアーに行けたらと夢見ています。その際は是非高知にも行ってみたいです。よく、どうしてフィンランドに

来たのかと質問される事があるのですが、色々な所でオーディションを受けて来て、やつのことでフィンランドのオーケストラのオーディションに合格したからです。ここまで二十から三十くらいのオーディションを受けました。それこそポルトガルから北歐四カ国、ドイツ、アジアのオーケストラ、もちろん日本でも。受けられる所はどこにでも行きました。オーディションによつては、招待制で、履歴書を送ってもオーディションにすら呼んでもらえない事があります。日本人の女性がトランペット奏者として外国のオーケに就職できたことはとても珍しい事で、そのことに日々感謝を忘れないよう過ごしていきたいです。

同僚にも恵まれて、最高の職場で仕事ができることは、本当に幸せなことだと思います。

夜の十一時半頃に日が沈み、三時頃から日が明けてきます。朝早くから鳥がさえずるので、目が覚めてしまう事もあります。冬と夏のこの極端な気候のせいで、体の時間の感じ方がおかしくなることがあります。



ヘルシンキのコンサートホール（外観）



中央が筆者

さくらぎ あつこ

一九七八年 高知市生まれ
土佐女子中学高校を経て、龍谷大学、京都市立芸術大学、スウェーデン・ヨーテボリ音楽大学、ケルン音楽大学に学ぶ。ドイツのドルトムント歌劇場、南ドイツ放送交響楽団の学生研修を経て、二〇〇九年よりフィンランド放送交響楽団に入団。



授業屋外中継の様子

南極観測隊 同行日誌(中)

森岡 美和

高知の子どもたちが見慣れないものは沢山ある。高知からすれば南極は寒い。雪や氷があるだけですごいのであるが、北海道の子どもにとっては、どちらも毎年当たり前に見られる現象である。しかも旭川などの冬は寒くて、これに比べれば南極昭和基地の夏の方が、ちょっと暖かいのである。逆にそのことを意外に感じる。昭和基地は南緯六九度にあり、南極点から二〇度以上も離れている大陸縁辺の東オングル島という島に設置されている緯度だけでいうと、極点と北海道の真ん中程ということになる。

た。特別厚手の防寒着を身につけても、半時もじっとしていれば、身体は冷え切って指も動きにくくなる。急いで宿泊所に帰っては、身体を温めて出直した。このように、白夜といえども一日の気温変化はしつかりあるのだ。実際に授業当日は旭川の方が寒かった。もちろん、日によって天候が大きく変化することもあり、外出禁止令の出るような日などは別である。また、今年の五三次隊では、同じ時期に最低気温が氷点下十五℃まで下がったらしい。南極も温暖化なのでは？と質問を受けるが、昭和基地付近に限ってはそのようなことはなく、むしろ寒冷化がここ数年続いている。ペンギンたちも、産卵のために上陸するのだが、氷の開きがなくて子育てに苦労していることだった。

下四十℃の寒気が流れ込み、北海道で四角い太陽が観測されたことをご存じだろうか。海面付近の大気の温度差によって光が屈折し、日の出・日没時に、丸いはずの太陽が変形して見えてしまうというものである。昨年のことが懐かしく思い出された。「しらせ」が南極海に入って、日に日に昼間が長くなり白夜が始まろうとしていた。日没が見られるのも後僅かになる頃、海の水は随分と増えて白々としていて、沈む夕陽にカメラを向けていると、残光が、長く氷海の上を伸びて、つぶれた歪な夕陽はいつまで経っても落ちない。おかしい！と思っていると、あれは太陽が蜃気楼になっているのだといわれた。高知でもだるま夕陽などの撮影に熱心な方がいらっしやるが、どちらもちょっとした天候の具合でお目にかかれることが少なく、あまり見られない現象なので貴重である。このほか、昼間の氷山の蜃気楼や、グリーンフラッシュ、彩雲、サンピラー等々……

た大気が周辺へ吹き出し、うねうねと海岸に向かって這い降りるカタバ風と呼ばれるものが卓越している。まるで息をするように時間帯によって風向風力を変える。A級ブリザードというのは、平均風速三十m毎秒以上の強風と吹雪で普通に立ってはいられないし、視界がないので遭難の危険を伴う。室内でじっとおさまるのを待つしかない。しかし、教員の体験のためにと安全な場所で外出が許可された。夏日中のブリザードは海からの風で意外と暖かく、台風を思わせるものであった。

活場所が濡れてしまうのを食い止めようと必死だった。子どもの頃住んでいた古家でもこれほど大変なことはなかった。このように、いろいろな体験を積みながら、授業で一体何を伝えるのか。臭いのない南極（腐敗が起らない）でも餅カビは生えるのか。雪だるまを作って！濡れタオル回しをやって欲しい！など、生徒の他愛ないリクエストにも応えながら授業資料を作った。そして、最終的に決断したのは、南極に行く前から疑問に思っていたアデリーペンギンのルツカリー（営巣地）の排泄物や死体のことを伝えようということだ。

や数、子育てなど生活サイクルに関する図鑑的なもの、人間の環境破壊によって鳥たちが傷ついているというような報告などは目にしたことがあるものの、意外と基本的な報告が見あたらない。毎年同じ場所や営巣するならば、相当量の排泄物や死体などが寒さで腐ることなく積み重なって堆積しているだろう。地面を掘ってみたら、過去の生活の堆積が見られるに違いない。そう考えていたのだが、実際はむき出しの岩盤と砂土の上に大小の石ころを敷き詰めた巣がそこそこあり、少しばかりの糞（オキアミ色）が、そこから放射状に広がって付着している程度だった。育てられないで放り出された卵も結構あった。一つのルツカリーを

縄張りを持つオトウソクカモメは、生きているペンギンを襲うよりむしろ、放置卵や子の死骸を食べて生活しているようだった。食物循環にも無駄がない。とにかく乾燥した風の大陸南極では、糞も乾き、天敵の食糧にもなれず取り残された少量の死骸はミイラ化し、風に晒されながら何年もそこに散在する。有機物の腐敗も堆積もそこにはなかった。映像をありのまま伝えようと思っただ。反対意見はあった。南極の印象の問題等々……しかし、それは、南極と日本の違いを最も良く表していた良い教材だったのだ。

(次号に続く)



屋外ブースはこんな感じ (筆者は奥端)



ルツカリーの上を飛ぶオトウソクカモメ



アデリーペンギンの遺骸と捨てられた卵

もりおか みわ

一九六五年 旧東津野村生まれ
高知大学理学部地学科卒業後、
公立高等学校の理科教員。現在
高知小津高校在籍。一九九五年
地学を広く楽しんでもらおうと
「高知地学研究会」設立に関わり、
現運営委員。二〇一〇年一
月～二〇一一年三月まで第五
二次南極地域観測隊に同行。小
学校などで南極授業や講演も行っ
ている。

高知出版学術賞を審査して 中内光昭

本賞の趣旨は、「要綱」によると、学術研究の「振興を図るとともに、市民の教養に資する」とされている。学術に関する出版物は、専門の学会誌での論文から、幅広い読者対象の「入門、啓蒙書」類まで、多種多様であるが、本賞が対象にしているのは市民が理解できるといえるような出版物であり、書籍の持つ学術的価値ではない。だが、時として、応募作品の中に研究者対象の専門書が混入していることがあり、二年前、本賞の募集要綱に、「特定の研究者のみが理解可能な高度の専門書は除く」という文言が付け加えられた。

本年の応募作品（対象図書は二〇一一年に出版されたもの）は十六点（昨年二十一点）で、やや少なかったが、人文関係の著作を中心に、労作が多く見られ、中には上記の「高度の専門書」に近い書籍もあり、担当審査員は例年以上の努力を強いられた。

第一次の審査で選出された八点の作品が、八名の審査委員により精読され、第二次審査で次の三点が受賞作に選ばれた。いずれも、県外研究者による著作で、このように三点すべてを県外研究者が占めるのは、二十二年の本賞の歴史でも二回目である。本県関係の魅力的な題材に、県外から熱い視線が注がれていることを物語っているのかも知れない。なお、受賞作に順位は付けられていない。



左から小林和幸、小松和彦、田中ゆかりの各氏

小林和幸著
「谷干城 憂国の明治人」
中央公論新社

国学者谷秦山の血をひき、坂本龍馬より二才下の谷干城（タニカンジョウ）は、戊辰戦争で功績を挙げ、西南戦争を勝利に導き、日本最初の内閣の農商務大臣に任ぜられたが、自由民権運動を批判し、天皇中心の国家を唱えた。そのため、戦後は、非民主的な「国粹主義者」として、批判され、無視されてきた。

干城は、西欧視察後、議会、言論の自由の重要性を主張し、藩閥政府を批判して下野し、日清、日露戦争では非戦論を展開している。さらに、足尾鋳毒事件では、現地を視察後、活発な救済活動を展開し、大隈宛の書簡では「とかく貧民の味方少なく、富商の加担者多く」と弱者を援護している。まさに「土佐のいごっそう」

小松和彦著
「いざなぎ流の研究
歴史のなかのいざなぎ大夫」
角川学芸出版

「いざなぎ流」とは、旧物部村（現香美市）の横山地区を中心に、「現代の安倍晴明」とも称される、大夫により守り伝えられてきた民間

信仰である。「いざなぎ流」の呼び名は、地元で古くから伝わっているものではなく、比較的近年、新たに名付けられたようである。その根拠は、本信仰で大切にされる「いざなぎの祭文」が、天竺天に住むという「いざなぎ大神」の教えに源を持つ、とされているためである。

著者は四十年にわたる現地での取材により、大夫の職能、祭祀や祈祷の実態、祭祀関連道具等、「いざなぎ流」に関する様々な事実を克明に記録すると共に、関連文書も参照しつつ、大夫たちの歴史の実像に迫っている。

横山地区の歴史に関して、現存する数少ない史料を丹念に読み解き、

「いざなぎ流」の背景に推考を加えている。歴史の流れの中で、本民間信仰が時の権力者と関わりつつ、いかに「生き延びて」きたか、広い視点からの推論も説得力がある。著者自身の言葉通り、「いざなぎ流の歴史民俗誌的研究」と呼ぶに相応しい壮大な研究である。

多くの資料が具体的に提示され、読み易く、主張も理解しやすい。ただ、膨大な資料に比べ、国内他地域での民間信仰の中で、いざなぎ流の位置づけなど一段の論考が望まれるが、それらは、予定されているという「いざなぎ流の祭文と祭儀（仮題）」に期待したい。

田中ゆかり著

「方言コスプレ」の時代
「七ヶ関西弁から龍馬語まで」
岩波書店

コスプレとは、コスチューム・プレイの略で、もともと、時代衣装などで演じる劇を意味するが、本書では、方言を衣装のように使って、自己を表現することを「方言コスプレ」と呼んでいる。

明治以降、方言は「恥ずべき」言葉として、矯正の対象になることはあっても、自己を飾る「衣装」として、表舞台に出ることは無かった。最近になり、若者を中心に、方言を自己表現の道具として使う傾向が見られ、「飾り」として多様な使い方

をされるようになってきた。

このような方言の価値の転換に注目した著者は、方言が出版物やテレビなどを通して「流通」してきた過程を探ると共に、方言の未来も推測している。特に、坂本龍馬が使う土佐方言に注目し、戦前から現代まで、漫画、小説などで、彼が使う言葉を徹底的に検証し、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」がキー小説であることを明らかにしている。

研究は極めて実証的で、テレビ番組での「方言指導」の有無の調査や、公表された諸種の調査や著者自身のアンケート調査など、多くの資料をもとにしていて、説得力がある。

言葉と社会の関係をユニークな視点から解明しようとした興味深い研究と言える。

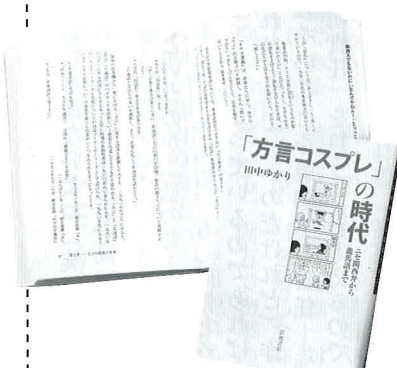
「谷干城 憂国の明治人」



「いざなぎ流の研究
歴史のなかのいざなぎ大夫」



「方言コスプレ」の時代
七ヶ関西弁から龍馬語まで」



なかうち みつあき

一九三〇年 静岡県掛川生まれ（本籍高知県）
高知大学理学部教授、高知大学長を二期歴任後、現在は、高知大学名誉教授。第二十二回高知出版学術賞審査委員長。専門は発生生物学。著書に「ホヤの生物学」（東大出版会）、「DNAがわかる本」（岩波書店）など。

「君の手の冷たさ」の なぜを読み解く

月さへさして
君の手の冷たさに
海の潮の鳴ることよ

(高村光太郎)

この三行詩を知ったとき、衝撃を受けた。学生時代のことだ。わずかな言葉の中から、物語が立ち上がってくるように感じた。清らかでしかも官能的な響きに打たれた。特に印象深かったのは「君の手の冷たさ」という表現だ。「冷たさ」という言葉が効いている。なぜ効いているのか説明できなかったが、教師になってから、ふと思いついてこの詩を中学一年生（一）の授業に投げ入れてみた。すると予想を越える活発な反応があった。

(以下、Tは私、Pは生徒である。)

T「時はいつ？」

P「夜。」

T「どうしてわかるの？」

P「月が出ているから。」

T「場所は？」

P「海のそば。」

T「どうして？」

P「海鳴りの音が聞こえるから。」

T「では、この詩の登場人物は何人だろう？」

P「二人。」

T「どうしてわかる？」

P「君の手の冷たさ」って言うてるから、「君」と呼ばれている人と君の手をにぎっている人がいる。だから二人。」

ここで私の考える「読みの不文律」を教えることになる。

T「では、この二人は同性だろうか異性だろうか？」

P「異性。」

T「どうしてそう思う？」

P「月が出ているロマンチックな海で、手をにぎり合うのはふつうは異性でしょう！」

T「はい。ロマンチックな夜に、男性どうしが手をにぎるという可能性

もないことはないよね(笑)。でも、こういう場合は可能性の高い方を読む。」

—というのが(私の考える)「読みの不文律」である。もし同性どうして手をにぎっているのであれば(それはそれでいいのだけれど)作者はそのことを説明する責任——「説明責任」を負う——と考えるのである。

T「では、「君」って、男性だろうか。女性だろうか。」

P「女性。」

T「どうしてそう思う？」

P「女性が男性の手ににぎることもないことはないけど、やっぱり男性が女性の手ににぎる可能性の方が高いんじゃないかな。」

T「よし。では、もっとも大事な発問をしよう。なぜ、「君」の手は冷たかったのだろうか？」

実は、答えは用意してなかった。ところが、生徒たちからは様々な声が上がられた。

「女の人の心が冷たかったから。」

「女の人は男を嫌っていた。」という説から、「あたりがものすごく寒かったから手が凍えた。」「女は死体だった。」というものであった。

その中に、次の意見があった。

P「女の人の手が冷たかったのは、男の人の手が熱かったからじゃないですか。手が熱くなっているときは、熱のある人の額に手を当てても、冷たく感じます。」

これだ、と思った。

T「そうかもしれないね。この詩の語り手は男で、その語り手が冷たいと感じているから、読者にもひんやりした感じが伝わってくる。でもそれは語り手の手が熱かったから……という可能性はあるね。でも、どうして男の手は熱かったんだろう？」

「お酒を飲んでいたら。」「酔っぱらっていたから。」「風邪で熱があったから。」などの意見が出たあと次の声が出た。

P「男の人は女の人が好きで、すごく熱くなっていたから。」

このとき、学生時代からの疑問が氷解してゆくのを感じた。

月光の中で男は女の手を握った。女の手は冷たさを通して自分の情熱の深さを感じとった瞬間、呼吸するようには海鳴りの音が轟き渡った。潮風が二人をつつむ……

ささやかな言葉にこだわりぬくことで、作品世界が開かれてゆく。読みの醍醐味はそこにあると、改めて悟った瞬間だった。

ひろい まもる

一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中等高等学校に勤務。国語の教師。



鎮守の森は今

県内の神社めぐり体験記(三)

竹内 荘市

神社巡りでの楽しみ方は色々ある。私は石段を見て歩くのが大きな楽しみの一つであった。昔の人は、神社を少し高い場所に、南または東向きに祀るといふ考え方があったと言われる。従って、山上や森の上、集落の小高い丘の上などに祀られていることが多い。そこで坂を上る石段が作られた。もちろん地形によってはその必要がない場合もある。

神社に着くと、まず鎮守の森の状態、雰囲気味わう。鎮守の森は、以前はかなりの広さがあったものが、戦中戦後の食糧増産のためにその一部が農地になったり、宅地や幼稚園、集会所にとられた所も少なくない。そのため鎮守の森がやせ細った所が見られる。

鳥居を潜ると石段がある(ない所もある)。最近では高齡化が進んだこともあって、石段とは別に車道が作られていることが多いのだが、私は必ず石段を登ることにしている。石段には色々な趣があり、往時の氏子や地域の人々の熱い思い、信仰心の深さが偲ばれる。割り石を整然と敷き詰めたもの、コンクリート造りで頑丈なもの、小石を敷き詰めたユニークなもの等様々である。

①数の多い石段

二百段以上となると凄い石段である。県内での最多は、香美市香北町の葦生山祇神社で八百段を超える。宿毛市沖ノ島の荒倉神社、高知市五

台山の星神社は四百段を超える。南国市岡豊の別宮八幡宮の石段も素晴らしい。

②厳しい石段

急勾配の厳しい石段もまた魅力の一つである。津野町の海津見神社、四万十町の須賀神社、宿毛市沖ノ島の日吉神社等の石段は、いずれも百段を超す急勾配、驚きを感じさせてくれる。

③その他の感動する石段

意外な場所で意外な石段に出合うことがある。林内に捨てられたような石段に出合うことが度々あった。苔生し曲線状に伸びた石段、風化した遺跡のようになった石段もある。そんな石段に出合うと、しばし呆然とする。悠久の生活文化の一端が人知れず残っていくのが悲しくさえ感じられた。

神社めぐりの、もう一つの楽しみは、鎮守の森の観察である。狛犬は神社の魔除け、守護の役目を担うとされる。狛犬の置かれている場所は、参道(参道狛犬)や拜殿(拜殿狛犬)が主である。面白いのは狛犬の種類や表情である。普通は獅子の雌雄一対で、口を開けた阿型、口を閉じた吽型が向い合っている。両方で物事の始めと終わりを表すとも言われる。ところが、県内の神社を巡ると、種類も型も一定ではない。もちろん置かれていない神社もある。種類としては獅子の他に牛や犬、鳩、猿、蛇、

ブタ、キツネ等がある。意外なものとしては人の顔をしたものがあり、それを見た瞬間鳥肌が立ったことがある。資料によれば、全国には干支十二支が何所かの神社で使われているという。

狛犬の素材は、古いものには石像が多いように思われる。最近ではコンクリート製が増えているように感じられる。大きさは、手の平に載るくらい小さなものから、見上げるほどに巨大なものもある。型も様々で、普通はお座りしているが、中には逆さになったり、寝そべったりしたものもある。玉をくわえたものや親子連れの微笑ましいものもあって面白い。雑木林の中の長い参道を、小鳥の鳴き声を聞きながら歩いてみると、狛犬がぼつんと座ってこちらを向いている。思わず「今日は、頑張ってるね」と話しかけた。訪れる人もなく鬱蒼と茂る森の中の参道に、苔生した年寄り風の狛犬が寂しそうに座っていた。何だか自分自身を見たような気分となり、思わず「ご苦労さん、まだまだ頑張ろうね」と声をかけ苦笑した。

たけうち そういち

一九三八年 高岡郡四万十町生まれ
専修大学法学部卒業。高知営林局、(特)損害保険料率算出機構高知調査事務所、(社)日本損害保険協会高知相談センター等に勤務。

高知市文化振興事業団

2月～4月の事業から

平成二十三年度公共ホール音楽活性化支援事業 BLACK BOT TOM BANDライブ



議事堂ミニライブの様子

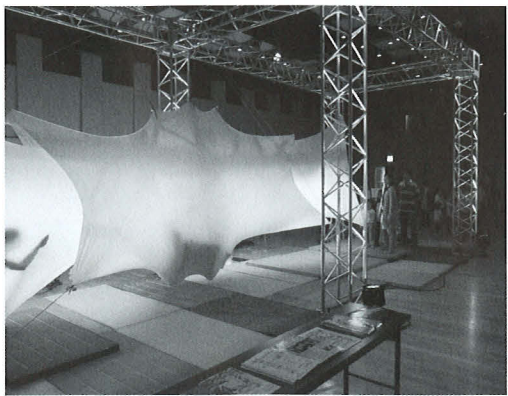
ニューオリンズスタイルをベースにした七人編成のブラズバンド「ブラック・ボトム・ブラズ・バンド」が二日間の地域交流プログラムと、かるぼーと大ホールでのスペシャルライブを行いました。まず、最初に訪れた九重小学校では、音楽交流以外に、お昼の給食も一緒に食べました。終始和やかな雰囲気、帰りにはお土産もいただきました。

では、浦戸小学校第二の校歌といわれる「いつもそばにいるから」をアーティストと先生が演奏。その伴奏で児童が熱唱するという貴重な共演をはたしました。

その後、高知市議事堂に場所を移し、議員関係者や一般の方を対象にしたミニライブを開催。厳かな会場の雰囲気やパッと明るくしてくれました。

次の日は、高知南高校吹奏楽部の皆さんと高いレベルでの音楽交流を実施。終了後は、延々と続く写真撮影会になりました。こうして、多くの人を巻き込みながら、かるぼーと大ホールでは満員に近い状態に。最後の曲「聖者の行進」で客席は総立ちに。自由な音楽の風を高知に届けてくれました。

スペースダンス・イン・ザ・チューブ



高知市文化プラザかるぼーと開館十周年記念事業として四月七日・八日に小ホールで開催されました。

現代舞踏家、福原哲郎さんが開発した、弾力性のある、やわらかい布で作られたスペースチューブを通り抜けて遊ぶイベント。

会場は、水の中に居るようなBGMが流れ、薄暗い照明が、一枚の布のように見える特殊なチューブを照らしている。子どもたちは、一見驚きながら、チューブの中に入ると思うように前に進めず大騒ぎ。多くの子どもたちは何度も何度も繰り返してチューブの中で踊っている。ジャンプをする子、でんぐり返しをする子、ハイハイで進む子、今までにない体験を味わう貴重な一日となった。

子どもだけではない、大人たちも興味津々。恐る恐るチューブに侵入、そのままこける人もいれば、スイスイ進んで行く人も。チューブを出る時は、生まれてくるようにニユルッと落ちる人もいて、年齢を問わず遊べる日となった。

チューブへの侵入を待つ人は途切れることなく、二日間で、延べ千二百人が不思議なチューブを体験しました。子どもたちからは、「またやってー」、「もっとやりたい」という声も聞かれ、高知初のイベントは、好評のうちに幕を閉じました。

第28回 写真コンテスト 「高知を撮る」 入選作品展



写真コンテスト「高知を撮る」の入選作品展を、三月二十日～二十五日、市民ギャラリーで開催しました。初日は午前十時より表彰式が行われ、入賞者には賞状と賞金が授与されました。その後、作品の審査にあたった審査員による作品講評も行われました。

今回は「記録写真部門」(昭和以前の部・平成の部)と「LOVE 高知部門」の二部門に合わせて高知県内外の九十七名の方から三百四十四点のご応募をいただきました。これらの作品に対し、報道関係者・学識経験者による審査を行い、両部門合わせて特選四点、準特選二十点を含む、入選作品六十八点を選出しました。会場にはこれらの入選作品を展示し、期間中五百七十四名の方にご鑑賞いただきました。会場では、高知の懐かしい風景や出来事、人々の暮らしを記録した写真を熱心に見入る鑑賞者の姿が多く見られました。来場者の中には、昭和時代に撮影された写真を見て、古き良き時代を振り返りながら話に花を咲かせる光景も見られました。

ワールドミュージックフェスティバル

四月八日(日)「ワールドミュージックフェスティバル」を開催しました。

本公演は「国際的な音楽交流を中心に高知を楽しくするプロジェクト」と共同で開催している人気コンサートシリーズをパワーアップし、かるぼーとの開館十周年を祝うお祭りイベントとして、「一日中世界の音楽と料理を楽しもう!」というテーマで行いました。

出演はこれまでのコンサートシリーズに出演してくれた高知県内のアーティスト九組と、ゲスト一組の全十組。ジャズ、タヒチ音楽、アイリッシュ、フラメンコ、南米音楽…と、盛りだくさんの内容でお届けしました。

最後のトリを務めるのは、「山村誠一のグランドラストイック」の皆さん。

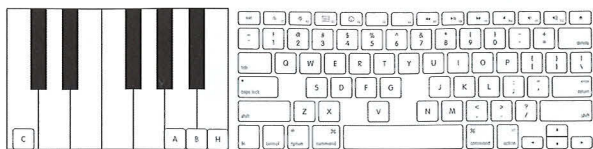


日本を代表するスタイルパン奏者であり、高知にも縁の深い山村さんが率いる大編成のスタイルパンオーケストラです。全二十四台のスタイルパンの響きは圧巻で、かるぼーとの前を通りかかった方々も、奥から響いてくる音楽につられて集まってくるほどでした。

たくさんのお客さんにお越しいただき「高知にもこんな素晴らしい音楽をする方がいることを初めて知った」「今後もこういうイベントを続けて欲しい」と、嬉しい言葉をたくさんいただいた催しとなりました。

IMPACT from BACH

クラシック音楽とクラブミュージック



現代においても新鮮さを失うことなく、多くの人びとに刺激を与え続けているクラシック音楽。本プログラムでは「音楽の父」と称されるバッハが作曲したゴールドベルク変奏曲を基に、「クラブミュージック」をキーワードとした技法やテクノロジーを使用し、新たな楽曲を公開制作します。ふたりの若きアーティストが創り上げる「新しい音楽」にご期待ください。

■出演
タケムラヤスシ (作曲家、ギタリスト、DJ)
伊藤 憲孝 (ピアニスト / 福山平成大学・エリザベト音楽大学講師)

日時：2012年6月2日(土)18:00開場 18:30開演
会場：高知市文化プラザかるぼーと小ホール
料金：全席自由 前売り1,500円 当日1,800円
お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

死に方を考える

老親の死を控えて、考えさせられることが多い。団塊の世代前後の人たちの多くは、老親を抱えて似たような問題に直面しているのではないかと感じる。

私の親は内臓不手、救急病院に運ばれ、一時は集中治療室に入ったが、今は鼻チューブで栄養を補給、ベッドで三カ月以上が経つ。管を取ろうとするので、手にはミトンのような大きな手袋をはめられていて自由がきかない。こんな状態で本人も嫌だろし、自分なら我慢できない。

もはや回復の見込みが無くても、病院ではいま出来る最善の処置をしようとする。どの病棟をみても、眠っているとも起きていともいえないような状態でみんな回復の見込みが無く、ただ死に向か

って管で栄養を流し込まれてベッドに横たわっているように見える。人間の最期として、これはどこか間違っている風景に思えてならない。

老親がこんな事態になって初めて、本来「生」と不可分であるはずの「死」をやっと真剣に考えるようになった。経管栄養を止め、必要最少限の水や薬などを与えるだけで、餓死か、あるいは老衰死(本人は九十八歳)となるようである。

餓死という悲惨に聞こえるが、口から食べることができなくなった終末期の人間には、むしろ自然なことのように思えてくる。これがもっとも理にかなうことではないのだろうか。

同年代の親の多くは、自分の死に際をどうするか書き残していることは稀だろう。生前死に方の話などできないのではないか。だとしたら、これだけ医療技術が進んでいる現在、残された家族が死に方を決断するしかないのだが……。(霖)

第64回高知市展関連事業 美術体感イベント

「あなた ダビンチ ぼくピカリ」

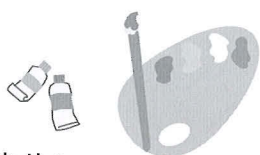
小中高生を対象とした美術が好きになる体験会。受付は当日12:45～。先着順のため材料がなくなりしい終了するので急いで来てね!

6月3日(日)

13:00~16:00

高知市文化プラザかるぼーと
前広場ほか

フリーパスポート 500円



お問い合わせ：
公益財団法人 高知市文化振興事業団
TEL：088-883-5071

今号の表紙

「つばめの空」 石川 日南子

つばめが空を飛び回る様子をシンプルに描きました。つばめののびのびとした感じが伝わればと思います。

(いしかわ ひなこ / 国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)

高知を撮る

第28回写真コンテスト入賞作品

巡回図書館

(昭和31年8月 高知市比島)

岡田 文夫



まだまだ本が高い時代であった。巡回図書館が来るのを楽しみにする子どもたちが多かった。

高知の教育現場が、結構ヤバイ！禁止されている携帯を学校に持ち込む。学校での講演会、一時間ずつとるで、静かになった瞬間は、「何か質問はありませんか？」と問われた時だけ。数学の授業では、式の最後に出た解を、解答欄に写せない高校生。理由は、「なんとなく書きたくない」。中学生になっても敬語が全く使えず、注意しても必ず口返事。全て自分基準、自分が知らないこと、興味のないことは学ばなくても良いと考える自己チュー生徒。「他人の文章なり作品を見て、良いところ悪いところを十箇所ずつ挙げて言っても、悪いところは全く指摘できない。これはディベートができないし、本当の国際人にはなれない」とある塾経営者は嘆く。相手を指摘できない子どもたちの言い分は、「悪いところを指摘したら、相手がキズ付くから」。

ふと会社での自分に置き換えてみた。私たちが新入社員だったころは、先輩や上司に完膚なきまで

アメ&ムチ



風俗歳時記

に打ちのめされ指導された。出社するのも嫌になって、何度も辞めたいと思った。そんな管理職にもご馳走になったり、的確な指導をもらったりしているうちに「いつかコイツを越えてやる」という気持ちが芽生えた。「褒める」だけでは得られない雑草根性が養われた。しかし、いざ自分が中年になってみて、後輩を怒鳴ることが出来るか、出社が嫌になるほど注意できるか、そのフォローとして「一杯やるか？」という流れは確立できていない。気持ちも金銭的な余裕もないと言え、それまでだが。

高知の子どもたちの明日を語る時、昔前の「褒める教育」では成果が上がらなかつたというところは誰も気がついていないことだろう。子どもも褒められることがほしい。ただ、「雷親父」や「うるさい大人」も時にはいる。家庭も行政も学校も職場も、愛情というムチを持って人育てに当たりたい。

(立花香)



- 絵画 (洋画)
- 日本画
- 書道
- 先端美術 (立体)
- 彫刻
- 陶芸
- 工芸
- 写真
- ペン字
- デザイン

北見市美術交流作品

第64回 **Independants** アンデパンダン

2012年 5月26日(土)～6月10日(日)

午前9時～午後6時 (初日は午前10時開場、最終日は午後5時終了)
〔ただし、月曜日は休館〕

【会場】
高知市文化プラザ かるぽーと
7階 市民ギャラリー

【入場料】
前売 300円 当日 400円

長寿手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳所持者、及び高校生以下は無料

【お問い合わせ】
(財) 高知市文化振興事業団 088-883-5071

【出品】
搬入日時：2012年5月20日(日)・21日(月) 午前9時～午後5時
搬入場所：高知市文化プラザかるぽーと7階市民ギャラリー
出品料(1部門)：一般1500円 学生1000円



かるぽーと

- 主催 高知市展代表委員会 (財) 高知市文化振興事業団 高知市教育委員会
- 共催 高知新聞社 NHK高知放送局 RKC高知放送 KUTVテレビ高知 KSSさんさんテレビ

デザイン：筒井啓道

